

若者の友人関係とジェンダー（２）／女性のライフステージ

弘前大学 羽渕一代

1 目的 ネットワーク研究の古典であるボットの夫婦役割分離とネットワークをテーマにした研究において、ロンドンの都市に住む高度に夫婦役割が分離した夫婦の事例研究では、「男には友だちがあり、女には親類があるんだ」というエピソードを分析している（エリザベス・ボット、1955=2006）。そのいっぽうで、夫婦役割が合同的な夫婦の場合、全く異なる友人関係を形成していることを明らかにしている。このように、女性の地位、役割、規範が社会によって異なり、それらが友人関係を形成するのか否か、友人関係がどのようなものであるのか、ということに影響する。そこで、本報告では、現代日本の女性、とくに 20 代女性がどのような友人関係を結んでいるのか、そして、そのありようは、社会状況、またはそれに関わる個人の社会的属性、と関連するのかということを示唆する。

2 方法 本報告は青少年研究会が 1992 年から 10 年ごとに採取している経時的データを使用している。調査対象は、東京都杉並区・兵庫県神戸市在住の 16～29 歳であり、また 3 回目の 2012 年調査では 30 歳～49 歳を対象も対象とした。無作為抽出法を用いた質問紙調査であり、1 回目のみ郵送法を用いているが、2 回目以降は訪問留置回収法によっている。2012 年調査の有効回収率は、16 歳から 29 歳対象分が 43.7%【男女＝46.4%：53.6%】であり、30 歳から 49 歳対象分が 39.9%【男女＝46.6%：53.4%】であった。

3 結果 若年女性の場合、同年代の男性よりも親友がいると回答する率が高い。ただし、30 代では男性のほうが女性よりも親友がいると答える率が高くなる。そして、過去 20 年間の変化としては、女性の友人関係の質の〈ひとり志向〉が増加し、〈あっさり志向〉がとくに増加している。若年女性は 20 年間で友人と一定の距離を置いてつきあう傾向が高まった。

注目すべき結果としては、20 代で友人関係の傾向がジェンダー分化しており、20 代に特有のライフスタイルとの関連が推測された。これは、学卒後の 20 代のワークライフバランスの傾向が示されているといえる。そして、パートナー・配偶者選択に関わり、友人関係の結びつきが関連しているという結果も得られた。友人関係のあり方が、恋愛交際の可否と関わっているのである。20 代までの若者において、友人関係への価値づけが、女性のほうが男性よりも高く、それに伴い、友人関係をもつ努力がなされているのではないかと結論できる。その後、ライフステージが変化すること、つまり定位家族から生殖家族へと所属家族が変化することによって、女性の親密性は家族に囲い込まれていくと結論できる。

1990 年代以降、女性の性的関心は減少している（林、2013）。これに関わって、いわゆる恋愛も不活発化していることが論じられている（渡辺、2013、木村、2016）。つまり、恋愛に対する不活発化と友人関係の〈あっさり志向〉がパラレルに深化したという見立てが可能である。

大会当日は、さらに詳細な分析結果を報告する予定である。

参考・引用文献

Bott, Elizabeth. 1955. "Urban Families Conjugal Roles and Social Networks" *Human Relations*, 8:345-384. 他